

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

## 〈研究ノート〉観光ガイドブック・写真帖にみる浅草観光のイメージ変化

品川, 勇翔 / SHINAGAWA, Yuto

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理 / JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

45

(終了ページ / End Page)

57

(発行年 / Year)

2023-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030142>

## 【研究ノート】

# 観光ガイドブック・写真帖にみる浅草観光のイメージ変化

品川 勇翔

現在、「観光地」とされる場所には、その場所を特徴づけるイメージが存在し、定着していることが多い。それら場所イメージが観光地の魅力となって固定され認識されることで、観光などの人々の行動に影響を与えている。本研究の対象地域である浅草においても、「下町情緒」や「江戸」といったイメージが定着している。本研究では、観光ガイドブック・写真帖の記述や写真を3つの時代に区分したうえで分析し、浅草観光のイメージがどのように変化してきたのか、特に「下町情緒」や「江戸」のイメージがどのように形成され定着したのかについて分析した。その結果、第二次世界大戦後、浅草は山手エリアと比較されるようになり、浅草六区の衰退と同時に観光ガイドブックや写真帖によって、「下町情緒」や「江戸」といった新たなイメージが創出されたことが明らかになった。

キーワード：浅草、観光イメージ、観光ガイドブック、写真帖、下町情緒

Keywords：Asakusa, Tourism Image, Tourist Guidebooks, Photo Albums, Shitamachi Atmosphere

## I はじめに

本研究では、観光ガイドブック・写真帖の記述や写真を分析し、浅草観光のイメージがどのように変化してきたのか、特に「下町情緒」や「江戸」のイメージがどのように形成され定着したのかについて明らかにすることを目的とする。

これまでに観光ガイドブックからイメージの変化を明らかにしたのが、稲本・岡田（2007）や有馬（2015）である。稲本・岡田（2007）は、月刊雑誌「月間京都」やJTB発行の観光ガイドブック内における京都タワーの言及率や言及内容を抽出し分析した。有馬（2015）は、JTBパブリッシング発行の「るるぶ富士山」における目次のテキスト分析を、KHcoderを用いて行った。また浅草におけるイメージ研究には、余（2006）や森下（2010）が挙げられる。余（2006）は、雑誌「東京人」に記載されている「浅草」に関する記事を対象にし、浅草の場所性を分析した。森下（2010）は、首都圏に住む10代以上の男女に対し、浅草への観光イメージに関するアンケート調査を行い、浅草観光の現状の分析をした。しかし、「下町情緒」や「江戸」といったイメージがいつ誕生

し、いつ定着したかを明らかにする研究はないのが現状である。

本研究の研究対象地域である浅草は、現在の台東区の地名であり、台東区東部一帯を指した総称である。1878年の「郡区町村編成法」の制定によって浅草区が設置されたが、現在はその浅草区と下谷区が合併し台東区を形成している。本研究では、台東区が設置されるまで設置されていた浅草区を対象地域とした（第1図）。

浅草は古くから観光地であるがゆえに、関東大震災や戦争を経験し、名所の誕生と崩壊、観光地としての発展と衰退を繰り返してきた。同時にその観光イメージもまた時代ごとに変化してきた。



第1図 研究対象地域・浅草の範囲

（ベースマップは標準地図）（QGISで筆者作成）

浅草ほど観光イメージが時代によって変化してきた観光地はほとんどないだろう。ゆえに本研究の対象地域を浅草とし、観光イメージの変化を明らかにすることとした。

本研究の方法は以下の通りである。まず分析対象となる名所図会もしくは観光ガイドブックを、明治、大正、第二次世界大戦前（以後、戦前とする）、第二次世界大戦後（以後、戦後とする）、平成、令和に至るまでの時代ごとに1冊から2冊選定した（第1表）。そしてそこに書かれている記述を分析し、加えて観光ガイドブックや写真帖に掲載されている写真についても分析した。

記述の分析方法は、明治時代のガイドブック『博覧会みやげ東京案内』から戦後のガイドブック『新日本ガイド／39 東京』までにおいては、テキストの読解を中心とした定性的に分析する。一方で『るるぶ東京』においては、有馬（2015）と同様にKHcoderを用いて定量的に分析する。

写真の分析方法は以下の通りである。選定した観光ガイドブック・写真帖（第2表・第3表）の全ページを対象に、掲載されている浅草に関する名所や行事の写真を抜粋する。それを時代ごとに集計し分析する。

対象とする時代については、記述内容において特に大きな変化がみられた明治時代から昭和の終わりまでを、第Ⅰ期から第Ⅲ期までの3つに区分し分析することとした。凌雲閣開業（1890）から関東大震災の前（1922）までを第Ⅰ期、関東大震災後（1924）から第二次世界大戦が勃発する前

第1表 記述分析で用いる観光ガイドブック<sup>1)</sup>

元号	西暦	タイトル	出版社
明治40年	1907年	博覧会みやげ東京案内	東京毎日新聞
大正3年	1914年	新東京遊覧案内	赤山堂
昭和15年 (戦前)	1940年	大東京案内	東京市
昭和36年 (戦後)	1961年	最新旅行案内5 東京と横浜	日本交通公社
昭和51年 (戦後)	1976年	新日本ガイド／ 39 東京	日本交通公社
平成・令和	2002～ 2021年	るるぶ東京	JTBパブリッシング

第2表 写真分析で用いる観光ガイドブック<sup>2)</sup>

時代区分	タイトル	出版年	出版社(者)
第Ⅰ期	東京名所指南	1890	小杉賢治
	改正東京名所案内	1890	長谷川常治郎
	東京案内	1890	巢鴨彫刷会社
	新撰東京独案内	1890	斯文館、叢書閣
	東京名所図絵	1890	双々館
	東京名所案内	1896	桜香武舎
	東京名所独案内	1896	和田文宝堂
	東京新繁昌記	1897	東京新繁昌記発行所
	最新東京名所	1900	高岡書店
	東京横浜一週間案内	1901	史伝編纂所
	東京案内	1906	日就社
	東京遊行記	1906	大倉書店
	東京遊覧案内	1907	博文館
	東京案内	1907	郁文社
	最新東京案内	1907	網島書店
	博覧会みやげ東京案内	1907	東京毎日新聞
	東京近郊遊覧案内	1912	毎日新報社
	東京案内	1914	実業之日本社
	新東京遊覧案内	1914	赤山堂
三日間東京案内	1914	三越呉服店	
大正博覧会と東京遊覧	1914	向上社	
大正の東京と江戸	1916	学芸社	
最新東京名勝案内	1918	広集堂書店ほか	
遊覧東京案内	1922	大東社	
第Ⅱ期	東京市内名勝案内	1932	東京市電気局乗客課
	大東京案内	1933	東京市
	大東京繁昌記	1934	成美堂書店
	大東京史蹟名勝地誌	1936	地人社
	大東京案内	1940	東京市
第Ⅲ期	東京	1953	日本織物出版社
	東京見物	1955	朋文堂
	東京案内記	1956	河出書房
	大都会東京	1958	平凡社
	新東京案内	1958	毎日新聞社
	東京	1959	文民書房
	最新旅行案内5 東京 と横浜	1961	日本交通公社
	東京一カラー	1969	山と溪谷社
	アルパインガイド 36 東京・横浜	1970	山と溪谷社
	新日本ガイド／39 東京	1976	日本交通公社出版事業局
	THE NEW 東京	1978	読売新聞社
	ポケットガイド 11 東京	1978	日本交通公社出版局 事業局
	郷土資料事典東京都・ 観光と旅	1980	人文社
	東京の旅 6	1981	朝日新聞社
	東京みどころガイド	1983	日本交通公社出版事業局
	マップルガイド 東京	1984	昭文社
エアリアガイド 11 東京	1986	昭文社	
トラベル JOY 東京	1987	山と溪谷社	
タウンガイド東京	1988	昭文社	

第3表 写真分析で用いる写真帖<sup>3)</sup>

時代区分	タイトル	出版年	出版社(者)
第Ⅰ期	東京景色写真版	1893	江木商店
	日本之名勝	1900	史伝編纂所
	東京名所写真帖	1902	山田繁蔵
	日本之勝景一名帝国美観	1902	日本地史編纂所
	東京名所写真帖	1902	美博堂
	都名所写真帖	1903	法蔵館
	最新東京名所写真帖	1908	いろは書房
	最新東京名所写真帖	1909	小島又市
	東京名所: Views of Tokyo (1)	1910	尚美堂
	東京名所: Views of Tokyo (2)	1910	尚美堂
	最新東京名所写真帖	1910	尚美堂画店
	東京風景	1911	小川一真出版部
	日本写真帖	1912	ともゑ商会
	東京府名勝図絵	1912	ともゑ商会
	東京史蹟写真帖	1914	画報社
	東京写真帖	1914	博文館
	実写奨都五十年史	1917	日本仏教協会
	日本名勝旧蹟産業写真集 関東地方之部	1918	富田屋書店
第Ⅱ期	大東京写真帖	1930	忠誠堂
	帝都復興記念写真帖	1930	帝都復興記念写真帖発行所
	帝都復興記念写真帖	1930	東京朝日新聞
	大東京写真案内	1930	東京乗合自動車遊覧課
	東京新寫真帖	1931	大日本雄弁会講談社
	日本名勝風俗大写真帖	1931	忠誠堂
	大東京写真大観	1932	白星社
	新東京名所兼案内寫真帖	1932	興文堂出版部
	東京百景寫真帖	1933	雄光社
	大東京写真案内	1933	博文館
	大東京名所百景写真帖	1934	青海堂
大東京名所百景写真帖	1936	青海堂	
大東京名所百景写真帖	1937	青海堂	
大東京写真帖	1940	尚美堂	
第Ⅲ期	大東京写真帖	1942	尚美堂
	大東京写真帖	1952	至誠書院
	Japan = ジャパン: 和・英文写真帖	1962	日本交通公社

(1940) までを第Ⅱ期、終戦(1945)から昭和の終わり(1989)までを第Ⅲ期とした。

なお、分析の際の注意点は以下の通りである。名所については、浅草寺境内でも比較的数の多かった「仲見世」や「雷門」は「浅草寺」とは別に集計したが、数の少なかった「五重塔」や「仁王門」は「浅草寺」として集計した。同じように、「吉原大門」や「角海老棲」も「吉原遊郭」として、

「映画街」や「興行街」といったものは「浅草六区」として集計した。

最後に本論文の構成は以下の通りである。第Ⅱ章では、明治・大正時代の観光ガイドブック・写真帖から多様かつ最先端なイメージであった浅草観光をみることにする。第Ⅲ章では、戦前・戦後の観光ガイドブック・写真帖から下町情緒というイメージの誕生をみていく。第Ⅳ章では、第Ⅱ章・第Ⅲ章をまとめ考察したうえで、現在の浅草観光のイメージがどのようなものであるのかについてKHcoderを用いた定量的な分析から考察する。そして最後の第Ⅴ章で、明治から現在までの浅草観光のイメージの変化をみたくてまとめる。

## Ⅱ 記述・写真にみる明治・大正時代の浅草観光

### 1. 記述にみる浅草観光

本節では『博覧会みやげ東京案内』(明治40年)及び、『新東京遊覧案内』(大正3年)を用いて読み取れる記述内容から、明治・大正時代当時の浅草観光のイメージを明らかにする。

「東京廣しと雖も四季間断なく繁昌するは浅草を以て第一とするは遍く人の知る所なり。(博覧会みやげ東京案内, 1907, p.17)」

東京一の観光地としてどの季節でも繁昌していることがこの一文からわかる。

「浅草と云へば直ちに見世物を聯想するが都人の習なり。げにも各種興行物の多きことは亦東京第一(博覧会みやげ東京案内, 1907, p.18)」

興行物といえは浅草というイメージが人々に定着していることがうかがえる。さらに、それらの見世物は六区に集中しており、興行といえは浅草六区であったということがうかがえる。

「此處に續いて一帶の活動寫真館がある。二十餘軒並び立つて(新東京遊覧案内, 1914, p.117)」

大正時代になると新たに活動写真館が立ち並ぶようになった。二十餘軒あるという記述もみられることから、映画街としての地位を確立していたことがうかがえる。

## 2. 写真にみる名所の掲載回数の変化

本節では観光ガイドブックや写真帖に掲載されている写真を用いて撮影対象となっている名所はどこであるのかを定量的に分析し、その変化をみることで浅草観光のイメージ変化を明らかにする。

### ●第Ⅰ期（1890～1922年）

第4表の第Ⅰ期をみると、浅草寺の掲載された回数が極めて多い。凌雲閣が最先端な浅草のシンボルであったとはいえ、やはり浅草観光の最大の観光名所は浅草寺であると認識されていたことがわかる。

一方で第Ⅰ期の特徴として、凌雲閣や浅草六区、花やしきなどの浅草寺以外の名所も多く掲載されていることが挙げられる。陣内（1991）が指摘したように「多義性と複合性に満ちた独特」な場所であったことが掲載されている写真からもうかがえた。同時にそれは浅草が多くを占めていたということであり、観光地としての地位の高さを示している。橋の掲載回数が多いことに関しては、吾妻橋が1887年に隅田川で初めて鉄橋となったことが要因として考えられる。その新しさから掲載が多かったと推察される。

## Ⅲ 記述・写真にみる戦前・戦後の浅草観光

### 1. 記述にみる浅草観光

本節でもⅡ章同様、Ⅰ章で示した観光ガイドブックの記述内容をもとに、それらが発行された当時の浅草観光のイメージを明らかにする。

#### 1) 『大東京案内』にみる浅草観光

本項では『大東京案内』（昭和15年）を用いて読み取れる記述内容から、特に戦前の浅草観光のイメージを明らかにする。

「同じ盛り場でも銀座はやゝ取り澄ました感があるが、浅草は誰にでも親しみ易い。大衆的だと云ふ点にその特徴がある。（大東京案内、1940、p.81）」

銀座が盛り場として大きく発展したこともあり、銀座との比較の上で述べられている。銀座と比較するとやはり親しみ易さや大衆的である点が特徴として挙げられる。現在のイメージに近いものが記述において初めてみられた。

#### 2) 『最新旅行案内5 東京と横浜』『新日本ガイド／39 東京』にみる浅草観光

本節では『最新旅行案内5 東京と横浜』（昭和36年）と『新日本ガイド／39 東京』（昭和51年）を用いて読み取れる記述内容から、特に戦後の浅草観光のイメージを明らかにする。

『最新旅行案内5 東京と横浜』（1961）

「戦災と戦後の激しい世相の移り変わりになんとなく残り残されてしまった感じで、復興へのいさましいかけ声とはうらはらに客足は横ばいを伝えられている。（最新旅行案内5 東京と横浜、1961、p.146）」

新たに発展し観光地となった地域と古くから観光地であった浅草とが比較され、浅草の盛り場としての地位が低下していることがわかる。

「近代的諸条件になかった新宿・渋谷・池袋など、山手ターミナルの発展スピードにくらべて、古い民衆信仰の場に育った盛り場の後進性は、今日必然の姿かもしれない。（最新旅行案内5 東京と横浜、1961、p.146～147）」

「近代的な山手」と「古い浅草」といった比較がされていることがわかる。山手が駅を中心に発展しているのに対して、近代的な魅力のない浅草は盛り場としての地位が下がり、観光地として衰退している時期であることがうかがえる。

「下町といっても中心からはずれ、大衆や地方人向けの雑さ通俗さの中に、垢ぬけのした古風な情緒も市井のそこかしこにひそめている。三社祭・ほおずき市・お富士さん植木市・形代流し・羽子板市などは、浅草色の濃い行事だ。（最新旅行案内5 東京と横浜，1961，p.146～147）」

山手エリアの発展に伴って「古い」や「下町」、「情緒」という表現も強調されるようになった。また「浅草色」といった記述もみられ、浅草の伝統的な行事の記述がされるようになっていく。観光地として独自の魅力が強調され始めている。

『新日本ガイド／39 東京』（1976）

「江戸っ子気質をいまに残す下町情緒たっぷり  
の街——浅草は、年中縁日のような街だ。それだけに、良くも悪くも下町の盛り場という雰囲気があるところにしみ込んでいる。（新日本ガイド／39 東京，1976，p.21）」

「浅草はやはり仲見世。江戸情緒豊かな店また店の連続で、毎日がお祭りの日のような賑わいを見せている。（新日本ガイド／39 東京，1976，p.21）」

『最新旅行案内5 東京と横浜』（1961）では遅れた観光地といった記述が目立ったが、『新日本ガイド／39 東京』（1976）では、「下町情緒」や「江戸情緒」といった現在の浅草のイメージに近い言葉が多く登場するようになっていく。

## 2. 写真にみる名所の掲載回数の変化

本節ではⅡ章2節同様、観光ガイドブックや写真帖に掲載されている写真を用いて撮影対象となっている名所はどこであるのかを定量的に分析し、その変化をみることで浅草観光のイメージ変化を明らかにする。

### ●第Ⅱ期（1924～1940年）

第4表の第Ⅱ期をみると、仲見世の掲載回数が最も多く、次に浅草寺、浅草六区と続いている。



第1写真 『大東京名所百景写真帖』（1934）より仲見世



第2写真 『大東京名所百景写真帖』（1934）より銀座

仲見世の写真は「仲見世の雑沓」というような写真のタイトルがつけられ、仲見世が多くの人と一緒に映し出され賑わう様子が写されていた。これは浅草の当時のイメージである「大衆的」「庶民的」のイメージに当てはまるもので、当時百貨店などが立ち並んだ銀座の写真と比べても、その雑多な様子は一目瞭然である（第1写真・第2写真）。

一方で浅草六区の掲載がまだ多くあることから、依然として浅草六区の浅草での観光名所としての地位が高かったこともうかがえる。隅田公園や浅草松屋、橋の写真が掲載されていることに関しては、第Ⅱ期で出来たもしくは建て替えられた新たな観光名所として掲載がされるようになった。

### ●第Ⅲ期（1945年～1989年）

第4表の第Ⅲ期をみると、仲見世が変わらず最も多く掲載されていることがわかる。続いて多いのは浅草寺で次に雷門が多い。浅草寺に関しては

戦災により境内の大部分が焼けてしまったことで、第Ⅲ期の初めの掲載回数が減った。一方で雷門がこの第Ⅲ期に再興されたことにより、浅草寺の新たなシンボルとして掲載回数が増えている。

今まで浅草寺境内において写真の掲載が多かったのは本堂や仲見世であったが、浅草寺を写すときのシンボルとして、雷門を写すことがこの時代から増えたことがわかる。

加えて第Ⅲ期の写真掲載の特徴として、第Ⅰ期から第Ⅱ期まで掲載されていなかった行事についての掲載回数が増えている点が挙げられる。

このように伝統的な歴史ある行事の写真の掲載することで、浅草らしさをつくりだすことにつながっていると推察できる。浅草六区については掲載回数が減少しており、観光地としての地位が低くなっていることがうかがえる。

第4表 第Ⅰ期(1890~1922)・第Ⅱ期(1924~1940)・第Ⅲ期(1945年~1989年)における名所写真の掲載回数のまとめ<sup>4)</sup>

名所	時代区分	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期
浅草寺		32	15	11
吉原遊郭		18	2	0
凌雲閣		18	0	0
吾妻橋		16	3	0
浅草六区		13	11	6
仲見世		11	16	13
東本願寺		11	0	0
待乳山		8	0	0
花やしき		5	0	2
隅田公園		0	7	0
松屋浅草		0	4	0
厩橋		0	3	0
言問橋		0	3	0
浅草駅		0	2	0
雷門		0	0	10
三社祭		0	0	3
羽子板市		0	0	3
ほおずき市		0	0	3
酉の市		0	0	3
その他		4	5	5

## Ⅳ 観光ガイドブック・写真帖にみる浅草観光のイメージ変化

### 1. 多様かつ最先端であった浅草観光のイメージ

#### 1) 明治・大正時代の浅草観光

明治・大正時代は『博覧会みやげ東京案内』(1907)『新東京遊覧案内』(1914)の記述、及び第Ⅰ期の観光ガイドブック・写真帖の写真を用いて当時の浅草観光のイメージについて分析した。

#### ●記述分析に基づく考察

当時の記述には東京の中でも「第一」との記述もあることから、その繁栄ぶりがうかがえる。一方で浅草寺周辺が公園に指定されたことにより、近代化が推し進められたことで大きく浅草の姿を変えるきっかけとなった。1885年に仲見世がレンガ造りになり、1890年には日本パノラマ館や凌雲閣が開業した。1903年には活動写真常設館である「電気館」が開業するなど、当時の日本ではあまり見ることの出来ない新しいものが浅草には多くあったこともうかがえる。さらに、詳細に見学をするためには「数日を費やす」必要があるとの記述もみられることから、浅草寺だけでなく多様な名所や遊びの場所があったこともうかがえる。

#### ●写真分析に基づく考察

写真帖にも浅草寺や浅草六区だけでなく、隅田公園や花やしきなど様々な名所が多く掲載されている。加えて新たなシンボル凌雲閣、鉄橋となった吾妻橋など「新しさ」や「珍しさ」といった特徴を持つ施設も多く掲載されている。これらから、「多様かつ最先端」な名所を持つ観光地であったことが掲載写真からも推察できる。

#### ●明治・大正時代の浅草観光

明治から大正時代の浅草は、浅草寺、吉原遊郭、興行街といった多様な名所に加えて、凌雲閣や活動写真といった新しいものを見ることが出来る「多様かつ最先端」なイメージの観光地であった

ことが確認できた。

## 2. 下町情緒が誕生した浅草観光のイメージ

### 1) 戦前の浅草観光

戦前は『大東京案内』（1940）の記述、及び第Ⅱ期の観光ガイドブック・写真帖の写真を用いて当時の浅草観光のイメージについて分析した。

#### ●記述分析に基づく考察

明治・大正と、東京「第一」の繁昌地であるとの記述のあった浅草だが、戦前のガイドブックにはそのような記述をみることができない。さらに「親しみ易い」「大衆的」といった記述があることから、明治・大正期にみることの出来た「多様で最先端」といったイメージはなく、現在の浅草のイメージと近い「庶民的な」イメージを表す語がみられるようになってきたことがわかる。

加えてこの観光ガイドブックには銀座と新宿などが新たに盛り場として紹介されており、銀座は「銀座の名は餘りにも有名である。東京の盛り場の代表であるばかりか、近代流行の源泉地でもある。（大東京案内、1940、p.80）」との記述がある。新宿についても「新宿の最近の発展振は大したもので、東京に於ける有数の盛り場である（大東京案内、1940、p.81）」との記述がある。このように銀座や新宿などが新しい盛り場として発展し台頭してきたことで、浅草と比較されるようになった。最先端な観光地が新たに現れたことで新たな魅力の創出が必要になった。

#### ●写真分析に基づく考察

この時代の観光ガイドブックや写真帖に掲載された写真からも記述分析と同様のことがうかがえる。この時期の掲載写真の特徴として、仲見世の掲載回数が最も多くなっていることが挙げられる。これは今まで最先端なイメージの強かった浅草において、最も「大衆的な」「庶民的な」場所は仲見世であり、「仲見世の雑沓」を多く掲載することによってそのようなイメージが強調されたとも考えられる。

### ●戦前の浅草観光

戦前の浅草観光は、大きな転換点となる時期であった。明治から大正に至るまでで定着していた「最先端」の盛り場というイメージではなく、「大衆的な」「庶民的な」盛り場としてのイメージへと変化した。これは銀座や新宿といった新しい盛り場が、この時期に急激に発展したことが大きな影響を与えていると考えられる。観光ガイドブックや写真帖の著者が、それら新たな盛り場とは異なるイメージを記述の表現や掲載写真において変化させたことで強調し新たなイメージが創出された。

### 2) 戦後の浅草観光

戦後は『最新旅行案内5 東京と横浜』（1961）と『新日本ガイド／39 東京』（1976）の記述、及び第Ⅲ期の観光ガイドブック・写真帖の写真を用いて当時の浅草観光のイメージについて分析した。

#### ●記述分析に基づく考察

『最新旅行案内5 東京と横浜』（1961）では、浅草の観光地としての衰退が記述から読み取ることができ、さらに浅草は「後進」的な場所としての表現もまた強調されている。

その15年後に発行された『新日本ガイド／39 東京』（1976）では、「下町情緒」や「江戸」といった現在の浅草の観光イメージと同様の記述がみられた。これはやはり山手エリアの発展との対比が考えられる。古くから変わらずあり続ける下町・浅草と、新しいものが次々に登場し流行の最先端となった山手エリアとが比較されることで観光地としての魅力の差別化がなされた。

#### ●写真分析に基づく考察

写真帖でも仲見世の掲載回数が最も多く、伝統的な行事の写真が多くなっている。写真に仲見世や伝統行事が選ばれていることは、これもまた「大衆的」「庶民的」といったイメージを定着させるための表現であると考えられる。



### ●戦後の浅草観光

戦後の浅草観光は、浅草に「下町」というイメージを誕生させ、山手との比較によってそれを際立たせた時期であった。これは戦前同様、ガイドブックや写真帖の著者が記述や掲載写真によって比較し表現したことが要因と考えられる。

以上から、戦前に「大衆的」「庶民的」といったイメージが徐々に生まれ始め、戦後に「下町情緒」という現在にも通ずるイメージが誕生したということが明らかになった。

### 3. 下町情緒が定着した浅草観光のイメージ

本節では2002年（平成14年）から2021年（令和3年）に発行された『るぶ東京』を用いて読み取れる記述内容から、平成から現在に至るまでの浅草観光のイメージを明らかにする。

#### 1) KHcoder による分析方法

分析方法は以下の通りである。まず『るぶ東京』において浅草の特徴について述べられている

記述を各年抜粋する（第6表-a, 第7表-b）。次に抜粋した文章からテキスト分析ソフトであるKHcoderを用いて自立語を抽出し、「歴史」「浅草寺」「飲食・購買」といった項目（第5表）に

第5表 抽出語分類<sup>5)</sup>

分類	概要
浅草寺	「寺院」や「お参り」、「雷門」「仲見世」といった浅草寺に関連した語
江戸・下町	「江戸文化」や「下町情緒」など江戸や下町というイメージに関連した語
歴史	「老舗」や「残る」といった浅草の歴史性を表現した語
特徴	「粋」や「風情」といった浅草の特徴を表現した語
観光	「名所」や「立ち寄る」といった観光に関連した語
飲食・購買	「グルメ」や「みやげ物」など飲食や購買に関連した語
娯楽	「大衆芸能」や「エンタメ」といった娯楽に関連した語

第6表-a るぶにおける対象地域「浅草」の概要（2002年～2008年）<sup>6)</sup>

西暦	浅草の概要
2002年	江戸時代は城下随一の繁華街。大正～昭和は六区興業街（現・六区ブロードウェイ）を中心に、多彩な魅力にあふれた都内有数の観光名所だ。 今も昔も庶民が集う浅草界隈。打ち水もすがすがしい商店や飲食店も軒を並べ、思いつくまま歩いても楽しいアミューズメントエリアだ。
2003年	浅草寺を中心に賑わう東京で有数の観光地 町の随所に下町情緒と江戸文化の名残が隅田川の西岸に広がる浅草は、古くから浅草寺の門前町。 江戸時代には浅草寺北方の吉原に遊郭が置かれたことから、大衆娯楽と遊興の街として栄え、今もなお、町の随所に江戸下町情緒が息づく。 初詣に始まり、三社祭、隅田川花火大会、年末の羽子板市など、年間通して、街をあげての祭りが行われるのもこの大きな特徴だ。
2004年	東京観光の定番といえやはり浅草。仲見世で東京みやげを買うもよし、人力車に乗って浅草巡りも一興だね。
2005年	雷門から浅草寺までのおみやげ店が軒を連ねる仲見世通り。 演芸場や遊園地など娯楽施設が集中する六区周辺、隅田川対岸に建つ近代的ビルなど、個性的な街並みを見せる。
2006年	下町情緒あふれる浅草寺の門前町。おみやげ物店が並ぶ仲見世を歩くもよし、老舗の味に舌鼓するもよし。
2007年	古き良き下町の風情が残る日本を代表する観光地
2008年	人情あふれた仲見世や江戸時代から続く老舗など粋な江戸文化が残る。THE・下町。 浅草寺と門前町に、たくさんの食事処やみやげ物店、映画館や寄席などお楽しみスポットがいっぱいの繁華街。お江戸の香りも残っているよ。

第7表-b るるぶにおける対象地域「浅草」の概要（2009年～2021年）<sup>7)</sup>

西暦	浅草の概要
2009年	江戸風情が残る日本屈指の観光名所
2010年	江戸の粋と歴史が香る東京下町・浅草。浅草寺でお参りを済ませたら、伝法院通りまで足をのばして、小粋なそぞろ歩きを楽しもう。 散歩のお供は仲見世のおやつでキマリ！粋な江戸情緒が息づく人気の下町エリア
2011年	東京下町の風情が残る観光名所 浅草寺の門前町として古くから栄えた浅草には江戸から続く老舗店や情緒ある仲見世など歴史を感じるスポットがいっぱい！
2012年	誰もが江戸っ子気分 下町と東京スカイツリーの新旧スポットだね
2013年	浅草寺や仲見世通りなど、下町情緒たっぷりのエリア。東京スカイツリーからのアクセスも◎。 浅草寺を中心に発展した東京を代表する観光地。周辺にはグルメや伝統工芸の名店がひしめき、一年中活気にあふれている。東京スカイツリー観光のあとに立ち寄って下町の新旧の名所を満喫しよう。
2014年	粋な文化と下町の人情が息づく街 浅草寺など下町情緒あふれるエリア。仲見世通りを散策しながらの食べ歩きもおすすめ。 江戸時代から浅草寺を中心に発展し、江戸・東京の大衆文化の中心として賑わってきた浅草。グルメや伝統工芸の老舗・名店や、由緒ある寄席や演芸場がひしめく、日本有数の観光スポットだ。
2015年	江戸の文化と下町の人情にふれる 江戸時代の風情が色濃く残る、東京を代表する下町。活気にあふれる、浅草寺を中心に年間約3000万人が訪れる。老舗の食事処や江戸小物の店、エンタメスポットなどが集う日本有数の観光地だ。
2016年	浅草のシンボル「浅草寺」、88軒の個性的な店が集まった「仲見世通り」を中心に、下町情緒が色濃く残る。 江戸時代から続くうなぎの老舗や寿司の名店で下町グルメを堪能しよう。落語など下町らしいエンタメスポットもあり、ぜひ立ち寄りたい。 江戸の情緒と文化の息づく東京下町の代表格 老舗の食事処や伝統工芸品店、演芸ホールなど、外せないスポットが目白押し。 1300年以上の歴史を誇る都内最古の寺院・浅草寺を中心に、活気あふれる商店街や大衆芸能の聖地と呼ばれた興業街が広がる、都内有数の観光地。
2017年	江戸文化を育んだ東京下町の中心地 浅草の代名詞浅草寺を中心としたエリア。有名な雷門を抜けてお参りへ！ 雷門の目の前に広がる歴史ある商店街仲見世通りでテイクアウトグルメ楽しい。 グルメの名店が多い浅草で老舗ランチも是非チェックしてみて。あめ細工や着付け、江戸切子を手造りなど、江戸文化を体験すれば気分は江戸っ子♪ 都内最古の寺院・浅草寺を中心に、国内外から観光客が集まる都内有数の観光地。江戸前グルメを楽しめる飲食店や、日本文化を体験できるスポットが多く、いつも活気にあふれている。
2018年	江戸幕府の祈願所、浅草寺を中心に育まれた下町文化が根強く残る。老舗グルメや大衆芸能など楽しみ方はさまざま。 浅草寺を中心に栄えた江戸文化が今も息づく 街の象徴は国内外からの観光客が訪れる都内最古の寺院、浅草寺。その周辺に、老舗グルメや大衆芸能、下町文化を体験できるスポットが揃う。個性的な店が増えている奥浅草は注目度上昇中。
2019年	都内最古の寺院、浅草寺を中心に発展したエリア。江戸・下町の文化が感じられる老舗グルメや大衆芸能などが楽しめる。 浅草寺を中心に粋な江戸文化の活気が残る 浅草寺の門前に発展した一大観光名所。国内外から年間3000万人が訪れる。着物のレンタル店や寄席など、下町文化にふれられるスポットが多い。 浅草花やしきは記念撮影に人気。江戸～昭和初期に創業した老舗の飲食店や甘味処、喫茶店が健在。長年愛される味を楽しむ。
2020年	浅草寺を中心に昔ながらの下町文化が根強く残る街。老舗グルメや大衆芸能など、古き良き東京を感じよう。 浅草寺を中心に粋な江戸文化が根強く残る 浅草寺の門前に発展した一大観光名所。国内外から年間3000万人が訪れる。着物のレンタル店や寄席など、下町文化にふれられるスポットが多い。 江戸～昭和初期に創業した老舗の飲食店や甘味処、喫茶店が健在。
2021年	浅草寺を中心に昔ながらの下町文化が根強く残る。老舗グルメや名喫茶、大衆芸能など古き良き江戸の様子が感じられる。 浅草寺を中心に粋な江戸文化が根強く残る 浅草寺の門前に発展した一大観光名所。国内外から年間3000万人が訪れる。着物のレンタル店や寄席など、下町文化にふれられるスポットが多い。 江戸～昭和初期に創業した老舗の飲食店や甘味処、喫茶店が健在。

分けて集計する。このような記述の分析をすることにより、現在の浅草観光のイメージはどのようなものであるのかについて定量的に明らかにする。

分析の際の注意点は以下のとおりである。自立語として抽出されたとしても、副詞や接続詞、「エリア」や「スポット」といった場所に関連する語や地名、出現回数が一回の自立語など、分析において必要ないと判断したものについては分析対象から除いた。「仲見世」と「仲見世通り」、「集う」と「集まる」などの筆者が同義と判断したものについては、同じ語として集計を行った。

なお出現回数が一回の自立語については、データ量が膨大になってしまうこと、さらに本節では浅草観光のイメージを明らかにすることが目的であり、詳しい出現回数を明らかにする必要はないなどの理由から、分析の対象から除き出現回数が二回以上の語を分析対象とした。

## 2) KHcoder による分析結果

2002年から2021年の『るるぶ東京』における、浅草に関する記述は合計で82文、抽出語は合計で317語であった(第8表)。本節ではこれらを分析対象とする。

第8表をみると浅草寺に関する記述が多い。出現回数は浅草寺が最も多く、関連する語も含めると76語と浅草全体の特徴に関する語に次いで多いことがわかる。加えて江戸文化や下町情緒といった語が多いことから、東京にいて江戸や下町を感じられる場所というイメージが定着していることがうかがえる。また浅草寺の歴史が古いこともあってか歴史に関する記述も同じく多く、その歴史性が浅草の魅力となっていることもうかがえる。

その他にも飲食や購買もまた古くから存在する名店や喫茶店など多くの飲食店があり、着物レンタルなど江戸や下町を感じる事の出来る観光地としての語が多くなっていることもわかる。

娯楽については吉原や六区があったころに比べると衰退は否めない。語の数もあまり多くないことがわかる。また多く建っていた映画館も現在は存在しない。しかし、大衆芸能や寄席などの語か

第8表 抽出語一覧<sup>8)</sup>

抽出語	出現回数	分類	抽出語	出現回数	分類
浅草寺	28	浅草寺	観光	14	観光
中心	18	浅草寺	名所	7	観光
仲見世通り	10	浅草寺	国内外	5	観光
寺院	4	浅草寺	年間	5	観光
都内最古	4	浅草寺	訪れる	5	観光
門前町	4	浅草寺	歩く	3	観光
門前	3	浅草寺	観光客	2	観光
雷門	3	浅草寺	立ち寄る	2	観光
お参り	2	浅草寺	合計	43	
合計	76				
			大衆芸能	6	娯楽
老舗	16	歴史	寄席	5	娯楽
残る	13	歴史	エンタメ	2	娯楽
江戸時代	6	歴史	演芸場	2	娯楽
発展	6	歴史	興業	2	娯楽
歴史	4	歴史	大衆	2	娯楽
昭和初期	3	歴史	合計	19	
創業	3	歴史			
続く	3	歴史	粋	7	特徴
育む	2	歴史	楽しい	7	特徴
合計	56		活気	5	特徴
			根強い	5	特徴
江戸	18	江戸・下町	息づく	5	特徴
下町	11	江戸・下町	多い	5	特徴
江戸文化	8	江戸・下町	文化	5	特徴
下町文化	7	江戸・下町	感じる	4	特徴
下町情緒	6	江戸・下町	代表	4	特徴
東京下町	4	江戸・下町	風情	4	特徴
合計	54		集まる	4	特徴
			一大	3	特徴
グルメ	10	飲食・購買	栄える	3	特徴
飲食	5	飲食・購買	健在	3	特徴
名店	4	飲食・購買	個性	3	特徴
喫茶店	3	飲食・購買	広がる	3	特徴
着物レンタル	3	飲食・購買	人情	3	特徴
甘味処	3	飲食・購買	都内有数	3	特徴
軒	3	飲食・購買	良い	3	特徴
食事処	3	飲食・購買	気分	2	特徴
体験	3	飲食・購買	情緒	2	特徴
店	3	飲食・購買	色濃い	2	特徴
伝統工芸	3	飲食・購買	新旧	2	特徴
みやげ物	2	飲食・購買	人気	2	特徴
商店街	2	飲食・購買	賑わう	2	特徴
味	2	飲食・購買	日本有数	2	特徴
合計	49		合計	93	

ら興行の街を表す語はいくらかみることができ  
る。

観光に関する語については国内外という語が、  
観光、名所に次いで多くなっている。日本らしさを  
東京で味わうことができる場所として外国の方  
に人気があることを示している。浅草の特徴を表  
す語については楽しい・賑わうといった一般的な  
観光地を表現する語がある一方で、「粋」「人情」  
といった江戸・下町情緒というイメージのある浅  
草ならではの語も目立っている。

本節では『るるぶ東京』を用いて、平成から現  
在に至るまでの浅草観光のイメージについて分析  
してきた。戦後、観光地として山手エリアとの比  
較から「下町情緒」や「江戸」のイメージが誕生  
した浅草であるが、それは『るるぶ東京』の分析  
結果からも多くみることができ、そのイメージが  
定着したことがうかがえる。さらに『るるぶ東京』  
の分析でも浅草寺に関連する語が極めて多いこと  
から、浅草寺を中心とした浅草観光の形態は戦後  
からあまり変化していないと言えるだろう。

しかし戦後においては、山手との比較の上で成  
り立っていた「下町」のイメージだが、平成に入  
ると山手との比較の記述がなくなり、「下町」イ  
メージが確立されたことも同時にうかがえる。

浅草六区は映画街としてのイメージは失った  
が、娯楽地としてのイメージを完全に失ったわけ  
ではなく、寄席や演芸場は今もなお残っている。  
このような娯楽に関連した要素は、名所としてだ  
けでなく浅草の「下町」や「江戸」といったイメ  
ージの一因であると推察できる。歴史に関連した語  
の多さや、浅草の特徴に関連した語の中に「粋」  
や「人情」といった「下町」や「江戸」を意識し  
た語が多くみられることから同様のことが言え  
るだろう。

よって平成から現在は、戦後に誕生した「下町  
情緒」や「江戸」といったイメージが定着した時  
期であると言える。そして、これまで浅草にあっ  
た映画街というイメージは完全になくなったもの  
の、寄席や演芸場、歴史を感じる老舗の店などの  
存在によって、そのイメージがより定着したこと  
もわかった。

## V おわりに

本研究では、観光ガイドブックの記述及び観光  
ガイドブック・写真帖の掲載写真の分析を通じ  
て、浅草観光のイメージ変化を分析した。明治・  
大正時代には六区の興行街や映画街、凌雲閣や鉄  
橋といった当時としては新しく珍しい名所に関す  
る記述や写真が多くみられたことから、「多様で  
最先端」な観光地であったことが明らかとなっ  
た。

戦前には銀座・新宿の発展に伴って、観光ガイ  
ドブックの著者が最先端というイメージから「大  
衆的」「庶民的」といった記述へと表現を変化さ  
せていることが確認できる。その後、第二次世界  
大戦が終わり日本が高度経済成長を遂げると、山  
手エリアの発展やテレビの普及などから浅草六区  
が衰退した。それとともに、浅草の観光地として  
の地位の低下が記述にみられるようになっていっ  
た。それら山手との比較や浅草の歴史性を背景  
に、「下町情緒」や「江戸」といった山手にはな  
い新たなイメージが誕生した。

さらに『るるぶ東京』の定量的な分析から、寄  
席や演芸場、歴史を感じる老舗の店などの存在に  
よって、現在は「下町情緒」や「江戸」といった  
イメージが定着している。

なお本研究では、観光ガイドブック・写真帖を  
用いて大まかなイメージの変化を明らかにするこ  
とはできたものの、細かな変化をみることはでき  
ていない。ゆえに、より細かな時代区分で詳細な  
観光イメージの変化を研究することは今後の課題  
としたい。

## 謝 辞

論文の執筆にあたり、指導教員である米家志乃布  
先生には長い期間にわたり、ご助言、ご指導を頂きま  
したことを心より御礼申し上げます。並びに日頃より暖  
かいご指導を頂いた法政大学文学部地理学科の諸先生  
方、共に卒業論文の執筆に取り組んだ人文地理学演習  
(5)の皆さまに感謝申し上げます。謝辞にかえさせてい  
だきます。

## 注 記

- 1) 記述分析の際の、時代ごとの観光ガイドブックの選定については、以下の通りである。明治以降戦前までの案内本については、森田ら（2003）が作成した分析対象リスト52冊のうち、東京を観光する目的の人たちのために出版されたものから選定を行った。戦後から現在は、観光ガイドブックの出版社において大手出版社として知られるJTBとその前身である日本交通公社のものから選定した。
- 2) 写真分析の際の、観光ガイドブックの選定については、明治以降戦前までを記述分析と同様に、森田ら（2003）が作成した分析対象リストから選定した。それに加えて戦後については、日外アソシエーツが出版した『紀行・案内記全情報45/91日本編』から選定した。
- 3) 写真帖の選定については、どの時代も「国立国会図書館サーチ」を用いて、タイトルに「写真帖」というキーワードを含むものから選定を行った。
- 4) 各種観光ガイドブック・写真帖より筆者作成。
- 5) 「歴史」「浅草寺」「飲食・購買」といった項目は、筆者が自立語を抽出したのち設定した。
- 6) 2002年～2008年のるるぶ東京における浅草の記述より筆者作成。
- 7) 2009年～2021年のるるぶ東京における浅草の記述より筆者作成。
- 8) KHcoderによって抽出された語より、筆者作成。

## 参考文献一覧

- 麻生将・長谷川奨悟・網島聖 2019. 人文地理学研究における視覚資料利用の基礎的研究. 空間・社会・地理思想. 22巻. 77-89.
- 有馬貴之 2015. 旅行ガイドブックにみる富士山観光のイメージ変化——『るるぶ富士山』の目次を対象としたテキスト分析——. 地学雑誌. 124巻6号. 1033-1045.
- 稲本健太郎・岡田昌彰 2007. 京都タワーのイメージ変遷に関する研究. 環境システム研究論文集. 35号. 47-52.
- 内田順文 1989. 軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージの定着について. 地理学概論. 62巻7号. 495-512.
- 片桐以直 1914. 新東京遊覧案内. 赤山堂
- 陣内秀信 1991. 迷路空間としての盛り場. 国立歴史民俗博物館研究報告. 第33集. 1-23.
- 墨田区立緑図書館 1993. 隅田川の橋——写真で見える歴史——. 墨田区立緑図書館.
- 滝波章弘 1995. ギド・ブルーにみるパリのツーリズム空間記述——雰囲気とモニュメントの対比——. 地理学評論. 68巻3号. 145-167.

- 東京市 1940. 大東京案内. 東京市.
- 東京毎日新聞 1907. 博覧会みやげ東京案内. 東京毎日新聞.
- 日本交通公社 1961. 最新旅行案内5東京と横浜. 日本交通公社.
- 日本交通公社 1976. 新日本ガイド/39 東京. 日本交通公社.
- 森下晶美 2010. 若年層から見た上野・浅草の観光イメージと誘致の可能性について. 観光学研究. 9. 117-128.
- 森田義規・羽生冬佳・十代田朗 2003. 明治以降戦前までの東京案内本の記載情報の変遷: 旧東京15区6郡を対象として. 観光研究. 15巻1号. 11-18.
- 余京珍 2006. 浅草における場所性の生成要因. 日本観光研究学会全国大会学術論文集. 21. 241-244.
- 吉見俊哉 1987. 都市のドラマトウルギー——東京・盛り場の社会史——. 弘文堂.
- JTB 2001. るるぶ東京 2002.
- JTB 2002. るるぶ東京 2003.
- JTB 2004. るるぶ東京 2004.
- JTB パブリッシング 2005. るるぶ東京 2005.
- JTB パブリッシング 2005. るるぶ東京 2006.
- JTB パブリッシング 2006. るるぶ東京 2007.
- JTB パブリッシング 2007. るるぶ東京 2008.
- JTB パブリッシング 2008. るるぶ東京 2009.
- JTB パブリッシング 2009. るるぶ東京 2010.
- JTB パブリッシング 2010. るるぶ東京 2011.
- JTB パブリッシング 2011. るるぶ東京 2012.
- JTB パブリッシング 2012. るるぶ東京 2013.
- JTB パブリッシング 2013. るるぶ東京 2014.
- JTB パブリッシング 2014. るるぶ東京 2015.
- JTB パブリッシング 2015. るるぶ東京 2016.
- JTB パブリッシング 2016. るるぶ東京 2017.
- JTB パブリッシング 2017. るるぶ東京 2018.
- JTB パブリッシング 2018. るるぶ東京 2019.
- JTB パブリッシング 2019. るるぶ東京 2020.
- JTB パブリッシング 2020. るるぶ東京 2021.

## 参考WEBサイト一覧

- 国立国会図書館 WEB サイト  
<https://www.ndl.go.jp/> (最終閲覧日 2022年6月16日)
- 聖観音宗あさくさかんのん浅草寺公式サイト  
<https://www.senso-ji.jp/> (最終閲覧日 2022年6月16日)
- 東京都立図書館 WEB サイト  
<https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/> (最終閲覧日 2022年6月16日)

## Changes in the Image of Sightseeing in Asakusa Seen in Tourist Guidebooks and Photo Albums

Shinagawa Yuto

Presently, places regarded as tourist destinations often have a well-established image that characterizes the location. These images of places are fixed and recognized as attractions of tourist spots and influence people's behavior, such as sightseeing. Even in Asakusa, the target area of this research, the established images of "Shitamachi atmosphere" and "Edo" attract tourists. In this research, we analyzed descriptions and photographs in tourist guidebooks and photo albums and investigated how the image of sightseeing in Asakusa has changed, in particular, how the perceptions of "Shitamachi atmosphere" and "Edo" were formed and established. As a result, it became clear that after World War II, Asakusa came to be compared with the Yamanote area, and, along with the decline of Asakusa's 6th district, new images such as "Shitamachi atmosphere" and "Edo" were created by tourist guidebooks and photo albums.